

## 「江戸に学ぶ循環型社会」

- 実施日時 令和6年12月12日(木)  
18時00分～20時30分
- 実施方法 対面開催  
場所：江東区深川江戸資料館
- 受講者数 抽選の結果34名  
(受講申込者数47名)



令和6年12月12日(木) 18:00～20:30

- 実施内容
- 1. 事務連絡・開講挨拶等
  - ・事務局から受講上の注意、全体スケジュール等の説明

### 2. 【見学】江東区深川江戸資料館を見学！

(講師) 江戸・東京 郷土史研究家  
久染 健夫 氏

東洋大学文学研究科日本史学専攻修士課程修了。専門は日本近世史。

荒川区・江東区の文化財専門員を経て、現(公財)江東区文化コミュニティ財団 深川江戸資料館・中川船番所資料館で勤務し、現在は歴史講座や都内23区内外の史跡巡りなどを行っている。



#### ○江東区付近の江戸時代の風景を通して

江東区付近の江戸時代の風景を見ながら、深川の生活や環境について説明を行った。

深川は、川の近くに位置し、船などの商売が多くあった。また、人が住む場所でもあったことから長屋などが立ち並び、住人や商売人などのいろいろな人がいた町であった。



#### ○江戸の街並み

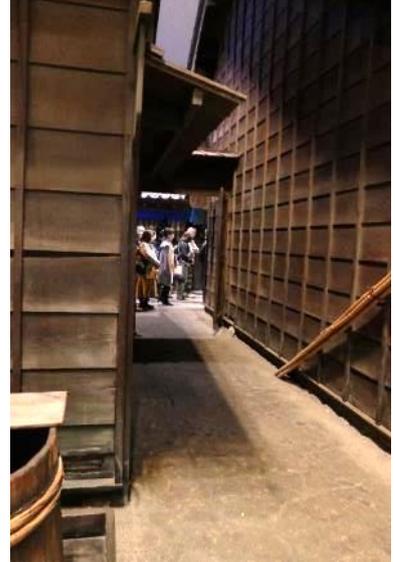
先ほど見た江戸時代の風景絵と比較しながら、全体の説明を行った。



○大店肥料問屋「多田屋」など

木場材木問屋、米問屋、そして干鰯・魚粕・魚油を扱う問屋を再現した場所を巡りながら、各お店で行われていた「循環」を学んだ。

例えば、イワシは干せば干鰯、油を搾った後は粕になり、どちらも肥料として使用されていた。また、油は行燈などで使用されており、余すところなく使用されていた。



○川と船宿

江戸時代、川がある深川では、船を用いることが多かった。川の深水が浅いため、棒で底をつき船を進めることができ、物や人を運ぶことができた。

川の深さも再現されており、覗き込み確認している参加者が多かった。また、思ったより浅いことから驚いている方も見受けられた。



○水茶屋と床店、木場の木挽職人

火の見櫓の下は広場になっており、普段は「水茶屋」などで休憩するスペースであった。火事の際は火が広がらないようにする場所でもあった。

江戸時代は火事が多かったが、木造で構造を簡単にし建設されたため、火事の後もすぐに復興出来ていたと言われている。



### ○長屋の井戸など

長屋には、井戸、共同便所、ごみ溜めが設置されていた。

ごみ溜めや共同便所に捨てられたものを回収する人が持っていき、それらはまた色々なことに使用された。例えば糞尿は発酵させ肥料にしていた。また肥料を作る際の発酵の工程は、熱も発生し土の温度を上げ早く野菜を収穫できることにも関与していた。



### 3. 質疑応答

**【質問】** 江戸時代も色々な仕事があったと思いますが、「今日から紙屑屋やります！」のように急に始めることは出来るのでしょうか。

**【回答】** 各業者のグループみたいなものもきちんとあったため、登録しなければいけない職業が多かったと思います。

また、汚穢屋なども誰がどここの物を持っていくか決まっていたため、安易に始めることは難しいです。

**【質問】** 行燈は、ろうそくの物もあったのでしょうか。

**【回答】** 行燈は基本油です。

ろうそくは高価だったので、使った後もロウを集めて再利用していました。

### 4. 自由見学、休憩

## 5. 【講演】江戸に学ぶ循環型社会

(講師) 大学院農学生命科学研究科

生物材料科学専攻 教授／総長特任補佐

五十嵐 圭日子 氏

1999年東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了、  
東京大学助手、助教、准教授を経て、2021年より教授。

VTT フィンランド技術研究センター卓越教授、東京大学総長特任補佐を歴任。江戸時代の循環を描いた「せかいのおきく」のバイオエコノミー監修を務める。



### ○研究分野～バイオエコノミー～

バイオマスを利用する研究を行っている。例えば、もし月に住む場合、重い金属を運ぶのは現実的ではない。そこで菌の分解反応の逆反応を使って、宇宙で物を作る実験などを行った。その他、「グッドライフ」、「安全・安心」、「産業再生」などを課題としていろいろな研究を行っている。



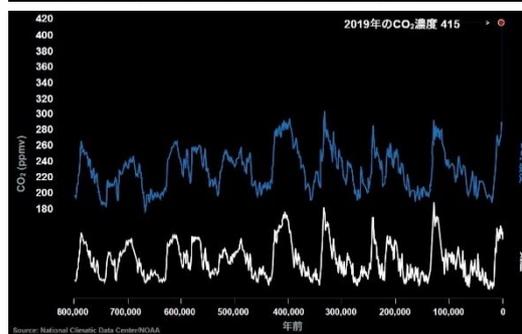
### ○世界で起こっていること

気温のグラフを見れば温暖化が起こっていることは明白であり、温暖化の原因であるCO<sub>2</sub>は増えている。このままだと、地球は人類が体験したことのないCO<sub>2</sub>濃度になる。しかも、対策しても、濃度を保持することはあっても下がることはない。すぐに対応しないと人類・地球が危ない。



### ○世界で行われているバイオエコノミー

世界ではこの危機を避けるため、原料をバイオにする流れが始まっている。木の素材でできた自転車や、キノコの胞子の緩衝材などが挙げられる。「その状態に日本はない」、と思われがちだが竹のバケツや昆虫食など、実は昔の日本が行っていた活動が実はバイオエコノミーで、いま世界が推奨しているものだ。



### ○日本のバイオエコノミー

昔の日本はバイオエコノミーを普通に実施していた。それをしなければならぬ状況だったからかもしれないが、バイオエコノミー



を実践する素質は日本にはある。今回の江戸の循環社会を振り返り、すぐに実生活に取り入れることは現段階では難しいかもしれないが、アンテナを広げいつでも対応できるようにしておいてほしい。



## 6. 質疑応答

**【質問】** 専門家ではないが、コンポストすることでミミズが分解してくれることを知れるなど、色々なことを学んでいる最中。ほかに何が出来るのか。

**【回答】** 食品用のプラスチックは厄介で、いろんな機能を持っているので分解しにくい。わざわざそのようなものに入れなくてもいいように「地産地消」を目指すと思う。今後は、東京の人たちは東京内で供給できるよう考えていかなければならなくなる。都内で頑張っている人もいるので、その人の応援をしてほしい、

**【質問】** パームオイルがもてはやされ使用されてきたが、現在環境破壊につながるとして使用が少なくなってきている。バイオエコノミーに関しても同じことにはならないか。

**【回答】** パームオイルはもともと環境について考えずに使用されていたが、バイオエコノミーは考えて作られているので二の舞にはならない。また、パームオイルはパームの育て方や使い方も問題とされており、人間がきちんと管理していたら解決できる部分もある。

**【質問】** サーキュラーエコノミーはとても面白いと感じた。しかし、自分とのギャップがある。日本でかかわるためにはどうしたらいいのか、情報の得方を教えてほしい。

**【回答】** 東京は環境への影響が感じにくいので、情報が入ってきにくい。

逆に地方では雪が降らない、お米の不作、台風による災害被害など、色々な影響を受けているため積極的に行動に移しているところが多い。例えば佐賀はバイオエコノミーを進めるために街が動いている。

東京がバイオエコノミーに関しては遅れているかもしれないので、地方の活動に目を向けはいかがでしょうか。

## 7. 閉講挨拶、アンケート記入、終了